

ものも言えず

外山滋比古

お茶の水女子大学の付属幼稚園長になった。それでまず考えたことは、こどもにどういう話をするかである。

かねてから、話するのは文章を書くよりはるかに難しいと思っている。大人を相手にものを言うのだってそうである。まして、三歳だの五歳だのといった幼児にわかることを話すのは難中の難である。

どうしたらよいのか見当もつかない。

もう十年も前のことになるが、学校帰りの小学生が三四人、道草を食いながらうちの門の前を通って行く。

「ぎょうのこうちようせんせいのはなし、よかったよな」
「ほんと」

小学校の校長の話はたいへんやりにくいときいている。低学年にわかりやすいことを言っていると、五年六年はバカにする。高学年に向ってもを言っていれば、一年生にはチンプンカンプン。ねらいをつけにくいというわけだ。

こどもがああいうことを言っているところを見ると、あの小学校には話の上手な校長さんがおられると見える。どんな人だろうかと空想したのはほんの一瞬の間であった。

「あんなにみじかいこと、これまでになかったもんな」というこどもの声にわが空想はみごとうつちやりを食った。

「スピーチとスカートは短かいほどよい」の中へ校長や社長、訓辞も加えた方がいかもしれない。

小学校の校長はたいへんなものだと思っていたが、幼稚園の園長はもっと骨が折れるということを、いよいよ入園式まであと十日余りになるまで大して気にもかけなかった、というのだからノンキである。

日本一の書店が店開きしたというから、参考になる本はないかと、見物をかねて出掛ける。ゆつたりしたところに幼児向けの本がたくさん並んでいるが、新米園長の話し方といった本などひとつもない。やむなく、幼児に聞かす民話を買って帰る。

なにかというと、すぐ本に助けを求める。わるいくせとは知りながら、まず図書館へ行く。ついで本屋。それで思った本がないと、たちまち無手勝流に豹変する。あわれな主知主義である。

近代の学問はどうしてこうも活字にしばられてしまった

のであろうか。本に書いてないことは価値のないこととぎめてかかる大学は、ろくに話のできない人間でないと一人前に扱われない。

そういう先生に教わった学生に話し方などのわかるはずがない。学校の教師になるのに、国語の先生でも、話し方の単位をとっていない。まして他教科においておや。

それでも、だれも、先生の話し方はあれでいいのかなどと非難するものはいない。文句の言えるほど上手な人がいないからである。

それをいいことにして、お互い話す努力を怠っている。大人同士なら我慢できる。こどもはおもしろくなければ聞いてはいない。わからなければ騒ぎ出す。そういう相手に通じることが身を付けていなくては、園長の資格はないと思つて身の縮む思いである。

「ものも言わず」新米園長、猛勉強中と言いたいところだが、「ものも言えず」当惑中である。

やはり、短かいことはいつまでもいいことだろうか。

(お茶の水女子大学)